

長江の「潮」はどこまで遡るか―張循之「巫山高」を手がかりに―

山田 和大

はじめに

『樂府詩集』卷十七に、初唐・張循之の「巫山高」がある。

- | | |
|---------|-----------------|
| 1 巫山高不極 | 巫山 高きこと極まらず |
| 2 沓沓狀奇新 | 沓沓として狀 奇新なり |
| 3 暗谷疑風雨 | 暗谷 風雨なるかと疑ひ |
| 4 幽巖若鬼神 | 幽巖 鬼神のごとし |
| 5 月明三峽曙 | 月は明し 三峽の曙 |
| 6 潮滿二江春 | 潮は滿つ 二江の春 |
| 7 爲問陽臺夕 | 爲に問ふ 陽臺の夕に |
| 8 應知入夢人 | 應に夢に入るの人を知るべきかと |

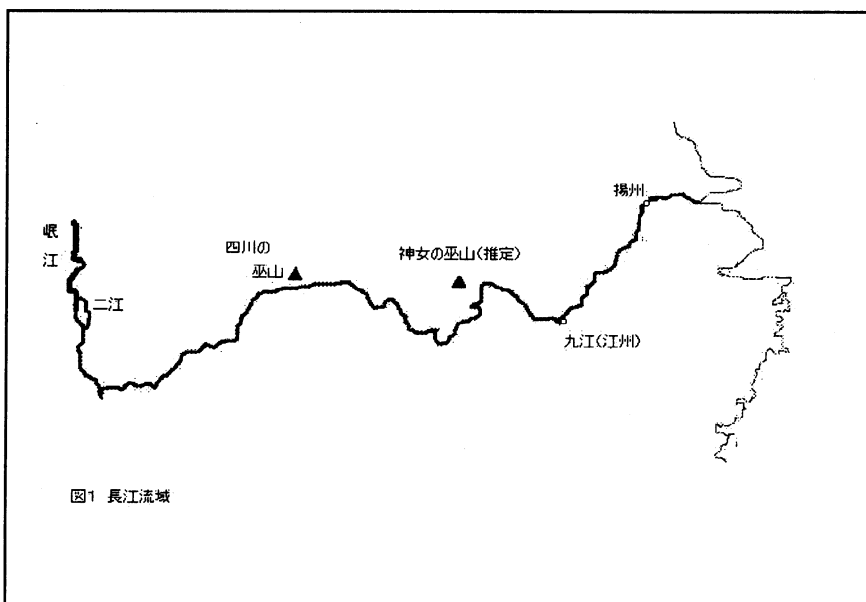
この詩の第6句に「潮」が「二江」に満ちるという表現がある。「二江」は、左思の「蜀都賦」(『文選』卷四)に「帶二江之雙流、抗峨眉之重阻。」「二江の双流を帯び、峨眉の重阻なるに抗ふ。」とあり、その劉逵注に「江水出岷山、分爲二江、經成都南、東流經之。故曰帶也。」(江

水 岷山より出で、分かれて二江と爲り、成都の南を經、東流して之を經。故に帶と曰ふなり。)とあるように、現在の岷江から分かれた郫江と流江の二つの川にはさまれた四川省成都市周辺を指す。地図上で計ってみると、この地は海から直線距離で約一四〇〇kmと、かなりの距離がある。それにもかかわらず、「潮」が満ちてくるというのは、いったいどういうことなのか。

「二江」を「九江」に作るテキストもある。⁽¹⁾「九江」であれば、現在の江西省九江市あたりで、海からは直線距離で約五〇〇kmである。「二江」に比べれば格段に海に近いが、それでも海からはまだ遠い(図一)。

また、この詩は「巫山高」という樂府題にも明らかにように、巫山を中心とする地域を詠んでいる。しかし、この「巫山」そのものに地理的な問題が存在する。

中国の詩では、地理的正確性が欠如していることが、まま見られる。「巫山」も実はその一例である。「巫山高」の古辞は、現在の四川省巫山県にある巫山の高さや、谷の深さなど、その地の険しさを詠んだものである。その後、『樂府解題』(『樂府詩集』卷十六)に「若齊王融『想



像巫山高』、梁范雲『巫山高不極』、雜以陽臺神女之事。無復遠望思歸之意也。」（齊の王融の「想像す 巫山の高きを」、梁の范雲の「巫山 高きこと極まらず」のときは、雑^{まじ}ふるに陽台神女の事を以てす。復た遠望思歸の意無きなり。）と指摘があるように、齊梁期以降「巫山高」は宋玉の「高唐賦」や「神女賦」に見られる神女伝説を取り入れて、神女の巫山を舞台にして作られるようになる。そこは、雲夢（現在の湖北省雲夢県）の南にあつたとされる⁽³⁾。その後さらに、梁の王泰「巫山高」（『樂府詩集』卷十七）は「谷深流響咽、峽近猿聲悲。只言雲雨狀、自有神仙期。」（谷深くして流響咽び、峽近くして猿声悲し。只だ言ふ雲雨の狀は、自から神仙の期有りと。）と詠み、険しい四川の巫山を舞台に、神女の象徴である雲や雨を詠み込んでいる。もともと雲夢の巫山のものであつた神女伝説が、四川の巫山に移つていったのである（図1）。張循之「巫山高」の巫山は、第5句の「三峽」という語から考へて、現在の四川省巫山県にある山を指していると思われる。この場合、「二江」から巫山は直線距離で約五五〇km、「九江」からは約六〇〇kmあり、いずれも相当な距離がある。

張循之「巫山高」第6句に「二江」「九江」の両様に作るテキストが存在すること自体も、今日の我々の目から見て、あるいは地理的正確性の欠如した表現として処理してしまつてもよいのかもしれない。本稿は、第6句の「潮滿」という表現に着目して、唐詩において「潮」は

長江をどこまで遡り、どのようなイメージを持っていたかを明らかにする。そして、「二江」と「九江」の内、どちらが張循之の本来意図した表現であったのかを検討してみたい。

なお、本稿で引用する唐詩は『全唐詩』による。詩題の下の巻数は特に断らない限り、『全唐詩』のものである。

一 「潮」がさかのぼる場所

長江の潮は、郭璞「江賦」(『文選』巻十二)に「呼吸萬里、吐納靈潮。自然往復、或夕或朝。激逸勢以前驅、乃鼓怒而作濤。峨嵋爲泉陽之揭、玉壘作東別之標。衡霍磊落以連鎖、巫廬鬼窟而比嶠。」(万里を呼吸し、靈潮を吐納す。自然に往復し、或いは夕に或いは朝にす。逸勢を激して以て前驅とし、乃ち鼓怒して濤を作す。峨嵋は泉陽の掲と爲り、玉壘は東別の標と作る。衡霍磊落として以て鎖を連ね、巫廬鬼窟として嶠きを比べ。)と、かなりの誇張があるにしても、「潮」が現在の四川省のあたりまで届くと描かれ、張循之の「二江」の「潮」の表現を裏付ける。

しかし、唐詩においては、長江流域で「潮」が見られる場所は限定されている。興味深いことに現存する資料に徴する限り、「二江」まで遡る「潮」は、六朝では詩も含めて「江賦」以外に見られず、唐詩でも張循之「巫山高」以外には見られない。

海に近いところから見ていくと、まず揚州(現在の江

蘇省揚州市)、京口(現在の江蘇省鎮江市)、金陵(現在の江蘇省南京市)の「潮」が見られる。ここでは、詩題に地名が示されているものも含めて例示する。⁴⁾

……鷺鷥山頭微雨晴、揚州郭裏暮潮生。行人夜宿金陵落、試聽沙邊有雁聲。

(李頎「送劉昱」卷一百三十三) 未曉已成妝、乘潮去茫茫。因從京口渡、使報邵陵王。

(丁仙芝「江南曲五首」其四、卷一百一十四) 江亭當廢國、秋景倍蕭騷。夕照明殘壘、寒潮漲古濠。…… (祖詠「晚泊金陵水亭」卷一百三十一)

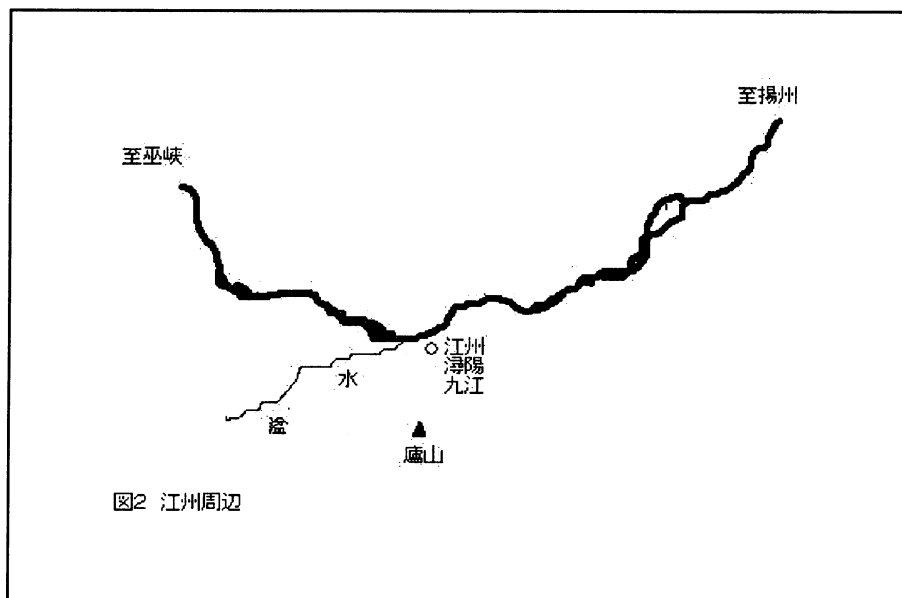
そこから、長江をさらに遡って、江州(現在の江西省九江市)あたりに「潮」が到達すると詠むものがある。具体的な地名としては、「江州」「九江」「潯陽」「湓城」「廬山」が詠み込まれている。⁵⁾

……近漱湓城曲、斜吹蠡澤隈。錫龜猶入貢、浮獸罷爲災。津吏揮機疾、郵童整傳催。歸心詎可問、爲覩落潮迴。

(蘇味道「九江口南濟北接蘄春南与潯陽岸」卷六十五) ……白首辭同舍、青山背故鄉。離心與潮信、每日到潯陽。

(劉長卿「江州留別薛六柳八二員外」卷一百四十七)

ここに詠まれているものは、張循之「巫山高」の別系統のテキストに見られる「九江」の地である。この地では次のような表現が見られることに注目したい。



……
 近得麻姑音信否⁽⁶⁾ 近ごろ麻姑の音信を得たるや否や
 潯陽江上不通潮 潯陽江上潮を通ぜず
 (顧況「題葉道士山房」卷二百六十七)
 ……
 海潮盡處逢陶石 海潮 尽くる処 陶石に逢ひ
 江月圓時上庾樓⁽⁷⁾ 江月 円なる時 庾楼に上る
 ……
 (徐鉉「送歐陽太監游廬山」卷七百五十二)
 ……
 湓城潮不到 湓城 潮 到らず
 夏口信應稀 夏口 信 応に稀なるべし
 ……
 (李治「送韓揆之江西」卷八百五)
 顧況の詩は、潯陽までは潮がたどり着かないと言い、
 徐鉉の詩は、廬山の麓で潮が尽きると言い、李治の詩は
 湓城(隋の呼び名。唐の潯陽と同じ地)まで潮が届か
 ないと言う。いずれも、潮が江州周辺までしか遡らないと
 詠み、江州が潮の遡ることのできる限界地点だと認識さ
 れていたと考えられる(図2)。
 唐詩に詠まれている潮の状況から見て、別系統テキス
 トに見える「九江」であればともかく、冒頭の「巫山高」
 に「二江」の「潮」が描出されるのは、やはり地理的に
 はあわないことになる。「二江」に作る方が張循之の意に
 沿う形であるとすれば、詩人に何かしらの意図があつて

「潮」を描いたと考えるべきだろう。次に「潮」のイメージを考えてみたい。

二 「潮」のイメージ

長江を一たび遡った「潮」は、やがて海へと引いていく。唐詩に見える引き潮は「かえる」としばしば表現される。次のように、唐の早い頃から見られる。

日夕三江望 日夕に三江に望み

靈潮萬里回 靈潮 万里を回る

…… (李嶠「江」卷五十九)

富春渚上潮未還 富春渚上 潮未だ還らず

天姥岑邊月初落 天姥岑辺 月初めて落つ

…… (孫逖「夜宿浙江」卷一百一十八)

李嶠の詩は、先に挙げた郭璞の「江賦」を踏まえ、夕方の三江（現在の江蘇省揚州市周辺）での眺めとして、潮が引いていく様子を詠み、「潮」が海へと引き返す様子を「回」と表現する。孫逖の詩は、浙江（現在の浙江省杭州市南郊を流れる川）の潮を詠んでいるものではあるが、夜更けにまだ潮が引いていない様子を「還」字を使って表現する。「回」と「還」について、『操觚字訣』卷四はそれぞれ「還ハ往ニ対シテ、先ヨリカヘルコト也。ユキタルモノノ、クルリトカヘルナリ」、「回ハクルクルメグ

リ回旋スルコト也。カヘルトヨムトキハ、トツテカヘスコト也。」と説明する。いずれもある地点を出発したものが、出発点へとかえることを言う。二つの詩に見える潮も出発点である海へと帰っていく点で共通している。「潮」はまた、帰るべき土地である故郷を思うときに詠まれる。

……

津吏揮橈疾 津吏 橈を揮るふこと疾く

郵童整傳催 郵童 伝を整へて催す

歸心詎可問 歸心 詎ぞ問ふべけん

爲視落潮迴 爲に視よ 落潮の廻るを

…… (蘇味道「九江口南濟北接蘄春南与潯陽岸」卷六十五)

……

靈巖聞曉籟 靈巖に曉籟を聞き

洞浦漲秋潮 洞浦に秋潮漲る

三江歸望斷 三江 歸望断たれ

千里故鄉遙 千里 故郷遙かなり

勞歌徒自奏 勞歌 徒だ自ら奏するのみ

客魂誰爲招 客魂 誰か為に招かん

…… (駱賓王「冬日野望」卷七十九)

蘇味道の詩は、九江（現在の江西省九江市）では、潮でさえ海に戻っていくのだから、人間である自分に故郷に帰りたいという気持ちがあるのは当然だと詠む。駱賓

王の詩は、三江に満ちてきた秋の潮を見て、遙か遠くの故郷に帰りたいという望みが断たれたと言う。この二首では、潮と望郷の思いとが結びついている。

潮に乗って出発する人を見送るといふ詩もある。

東越相逢地 東越 相逢ふの地

西亭送別津 西亭 送別の津

風潮看解纜 風潮に纜を解くを看

雲海去愁人 雲海に愁人去る

……

(張子容「送孟八浩然歸襄陽二首」其一、卷一百一十六)

……

吳歌喧兩岸 吳歌 兩岸に喧しく

楚客醉孤舟 楚客 孤舟に酔ふ

漸覺潮初上 漸く覺ゆ潮の初めて上るを

悽然多暮愁 悽然として暮愁多し

(祖詠「送劉高郵稅使入都」卷一百三十二)

張子容の詩は、孟浩然が越の東部である永嘉(現在の浙江省温州市)から西の襄陽に帰るとき、順風と順潮に乗って出発しようとする様子を詠んでいる。祖詠の詩は、夜に送別の宴をしているときの様子を詠み、潮が満ちてきているのに気付いて、憂いがわき起こつてくると言う。いずれも潮が満ちてきていることが旅人の出発を促し、残される人との別れを想起させている。

歸人乘野艇 歸人 野艇に乗り

帶月過江村 月を帯びて江村に過ぎる

正落寒潮水 正に落つ 寒潮の水

相隨夜到門 相隨ひて夜に門に到る

(劉長卿「送張十八歸桐廬」卷一百四十七)

この詩は、夜に張某が引き潮に乗って桐廬(現在の浙江省桐廬県)に帰っていくのを見送る場面を想像している。後半二句は、潮に乗っていくとあつという間に桐廬の門にたどり着くだろうと言い、潮が船足を速めるものとして詠まれている。

張子容、祖詠、劉長卿の三首では、潮が別れの悲しみをいや増すのである。

また、送別の場面で詠まれているものには、次のようなものもある。

……

落花馥河道 落花 河道に馥り

垂楊拂水窗 垂楊 水窓を払ふ

海潮與春夢 海潮と春夢と

朝夕廣陵江 朝夕に広陵の江にあらん

(万齊融「送陳七還広陵」卷一百一十七)

この詩は、現在の広陵(江蘇省揚州市)に帰っていく

陳某をおくるときに詠んだ詩である。潮と一緒に、春に
みる夢が朝夕、広陵に届くであろうと詠む。「春夢」は、
包融の「送国子張主簿」（卷一百一十四）に、

春夢隨我心 春夢 我が心に随ひ

悠揚逐君去 悠揚として君の去るを逐ふ

と、去りゆく君を追いかけようとする自分の心とともに
「春夢」も君を追いかけるという表現がある。万齊融の
詩も相手を思うことを言うために、「春夢」を使っただけ
であろう。これと同列にある「海潮」は、単に満ち引きの
ことを言っているとも考えられるが、「春夢」が自分の心
とともに相手に届くのと同じように、自分の思いを陳某
が帰っていく広陵に届けるものとして詠まれているので
はないかと考えられる。

「夢」は形を持たないが、手紙は実体を持って自分の
思いを相手に届けてくれる。そこで、「潮」が、張継や劉
長卿によって手紙を運ぶ媒体として詠まれるようになる。

京口情人別久

揚州估客来疎

潮至潯陽回去

相思無處通書

京口に情人 別るること久しく

揚州に估客 来たること疎なり

潮は潯陽に至りて回り去り

相思ふも処として書を通ずる無し

（張継「奉寄皇甫補闕」卷二百四十二）

……

白首辭同舍 白首 同舍に辞し
青山背故郷 青山 故郷に背く
離心與潮信 離心と潮信と
毎日到潯陽 日毎に潯陽に到る

（劉長卿「江州留別薛六柳八二員外」卷一百四十七）

形檐江上遠 形檐 江上に遠く

萬里詔書催 萬里 詔書催す

獨過潯陽去 獨り潯陽を過ぎて去り

空憐潮信迴 空しく憐れむ 潮信の廻るを

……（劉長卿「奉送裴員外赴上都」卷一百四十七）

張継の詩は、潮が潯陽までは届いてもそこで引いてし
まうから、そこから先に手紙が届くことはないと言う。

劉長卿の一首目は、離別した後の自分の心と潮に乗って
いくたよりとが毎日薛弁、柳渾のいる潯陽に届くだろう
と詠む。二首目は、自分のいる潯陽を通り過ぎていく裴
某を見送った後、裴某は帰ってくることもなく、私自身
はむなしく潮に乗ってくるたよりを気にし続けることに
なるだろうと詠む。劉長卿には、「潮信」という語こそ使
わないが、似たような発想の句として、「和州送人帰復鄆」
（卷一百四十七）に「獨過潯陽去、潮歸人不歸。」（獨り
潯陽に過ぎりて去り、潮は帰るも人は帰らず。）と言い、
人は帰ってこないが潮は変わらず自分のところに届くと
いう表現がある。

では、なぜ潮と手紙を結びつけられたのであろうか。

一つには、先ほどまで述べてきたような「潮」が詠まれてきた系譜がある。張継、劉長卿より前に、「潮」が送別の場で詠まれたり、相手へ思いを届けるイメージを付与されていたりしたのを踏まえていると考えられる。とくに劉長卿の「江州留別薛六柳八二員外」詩の最終二句は、万斉融の最後の二句と同じ構造である。彼は万斉融の句を意識し、ことばを換えて、ほぼ同様の意味を述べようとしたのだらうと思われる。

もう一つ考えられるのは、江州という場所柄である。同じ江南道に属する衡州（現在の湖南省衡陽市一帯）には、回雁峰があり、雁はここで冬を過ごし、春を待たずに北に帰っていく。回雁峰は、雁が飛ぶことのできる南限であり、雁が北へ「かえる」場所である⁽⁹⁾。

唐詩を見てみると、李頎「送從弟遊江淮兼謁鄱陽劉太守」（卷一百三十三）の「潯陽北望鴻雁回、潯水東流客心醉。」（潯陽に北望して鴻雁^{かへ}回り、潯水東流して客心酔ふ。）に見えるように、回雁峰のある衡州と同様に、江州でも雁がかえっていくという描写が見られる。江州の雁に見える「かえる」というイメージが、前述した潮が「かえる」というイメージと重ね合わされたのではないだろうか。

さらに、雁は漢の蘇武の故事⁽¹⁾以来、手紙を運ぶ鳥として認識されるようになる。万斉融の詩の潮に見えた「思いを届ける」という役割は、手紙の役割そのものである。この点でも潮と雁の持っていたイメージが重なる。

ただ、先に挙げた張継、劉長卿の詩三首には、雁が現れない。しかし、「手紙」を媒介として「潮」と「雁」とが結びついたことは、張継、劉長卿以前の唐詩に、次のようなものがあることから説明できそうである。

客路青山外

行舟緑水前

潮平兩岸闊

風正一帆懸

海日生殘夜

江春入舊年

鄉書何處達

歸雁洛陽邊

客路青山の外

行舟緑水の前

潮は平らかに兩岸^{ひろ}闊く

風は正しくして一帆懸く

海日 残夜に生じ

江春 旧年に入る

郷書 何れの処より達する

帰雁 洛陽の辺にあり

（王灣「次北固山下」卷一百一十五）

王灣は、潮が見られる北固山（現在の江蘇省鎮江市東北部にある）に北方から帰ってきた雁が手紙を運んでくると詠む。このように、揚州あたりのことではあるが、すでに盛唐期には「潮」と手紙を運んでくる「雁」が同じ土地で同時に詠まれることがあった⁽²⁾。

潮と手紙が結びつけられた二つめの理由を整理すると、張継や劉長卿は、

① 長江流域で同時に詠まれることのあった「潮」と「雁」が、

② ともに出発点へ「かえる」というイメージを持つ

ていることをもとに、

③ ともに出発点へ向けて引き返していく江州の地で、
④ 「潮」の持っていた「思いを届ける」というイメージに、「雁」の持つ「手紙を運ぶもの」というイメージを重ね合わせて、「潮」に「手紙を運ぶもの」というイメージを付与した⁽¹³⁾となる。

この「潮」が手紙を届けるというイメージは前出の顧況「題葉道士山房」や李治「送韓揆之江西」などにも受け継がれていた⁽¹⁴⁾。

おわりに

長江の「潮」は九江まで遡る。遅くとも中唐期には、そのように認識されるようになっていた。第一節に挙げた顧況「題葉道士山房」の「潯陽江上不通潮」（潯陽江上潮を通ぜず）という句などから、それは窺える。また、九江まで遡った「潮」は、手紙を届ける媒体というイメージが付与された。このことは、第二節で言及した劉長卿「江州留別薛六柳八二員外」の「離心與潮信、每日到潯陽。」（離心と潮信と、日毎に潯陽に到る。）などから見て取れる。この「潮」と「手紙」の結びつきには、九江の土地柄も関与している。九江が属する江南道には衡州があり、衡州には回雁峰があった。引き返していく「潮」と引き返していく「雁」との連想から、「潮」と「手紙」が容易に結びついたのだろう。このようにして、九江と

いう土地と「潮」とが密接につながるようになったのだろう。しかし、このようなイメージの形成は直線的になされるものではなく、いくつかの要素が有機的に結びついていくものであって、その過程にはもう少し複雑なものがあったはずである。

「はじめに」で言及したように、張循之「巫山高」の第6句には「潮滿二江春」に作るテキストと「潮滿九江春」に作るテキストとがある。右に述べてきたことを踏まえると、この詩本来の形については、「二江」に作るテキストの方が本来のものであった可能性が高いのではないかと思われる。初唐の作である張循之「巫山高」は、「九江」の潮を詠むには時代的にやや早いからである。

この「二江」と「九江」の違いは、単なる地名の違いと言うよりも、本稿で述べてきた長江の「潮」が持つイメージが与えられることによって、作品全体の読みを左右するものとなるだろう。

「二江」であった場合、第6句は潮が四川省まで届いたという表現になる。張若虛「春江花月夜」『全唐詩』卷一百一十七には「春江潮水連海平、海上明月共潮生。」（春江の潮水、海に連なりて平らかに、海上の明月、潮と共に生ず。）と、冬が終わり春になると潮が満ちていくという表現が見られる。二江にまで届く潮というのは、春の勢い盛んな潮の様子を描写しているのだろう。第2句にある巫山の「奇新」の具体的な表現である。

第8句の「入夢人」とは、「高唐賦」・「神女賦」を踏

まえ、楚の襄王や宋玉の夢に入ってきた巫山の神女を指す。「二江」のテキストの場合、神女を夢に見ること自体も、巫山の「奇新」のひとつとして描かれ、作品全体が「奇新」をキーに構成されていることになる。

「九江」の場合、右に述べたように、潮の到達点として多くの類似表現を見ることができ、より適当であるように見える。表層的には、巫山の神女伝説を踏まえ、第5句から第8句は、「明け方に有明の月が見え、潮が遡ってきたここ九江。夕べ、あなたの夢に現れたあの人が誰かわかりますよね、宋玉や楚の襄王が夢で逢ったというあの神女ですよ。」という意味合いになる。しかし、本稿で述べたとおり、九江の潮は、離れている人へ手紙を届けるというイメージを伴う。すると第6句は、離ればなれになつて人からのたよりが潮とともに「九江」まで届いた、という読みも可能になるのではないか。さらに、夢と潮とのセットは、第5句から第8句を「有り明の月が見えるころ、春の潮が満ちてきて、あの人のたよりをここ九江に届けて来ました。昨夜、夢に現れたあの人が誰か、きつとわかりますよね。思っているあの人はですよ。」という解釈を導き出す。この場合は、作品に送別詩に似た趣が生まれることになる。

それにしても、「九江」と四川の巫山とは、直線距離で約六〇〇kmの隔たりがあり、実際に巫山から九江が見えるということとはあり得ない。

そこで、唐詩の表現を見てみると、喬知之「巫山高」

(卷八十一)に「巫山十二峯、參差互隱見。潯陽幾千里、周覽忽已徧。」(巫山の十二峯、參差として互ひに隠見す。潯陽幾千里、周覽して忽ち已に徧し。)とあり、高い巫山の上からは、数千里(二里は約五〇〇m)の彼方にある潯陽まで見渡すことができると言う表現がある。また、胡皓「出峽」(卷一百八)に「巴東三峽盡、曠望九江開。」(巴東三峽尽き、曠望す九江の開くを。)と、巫山のある三峽と九江が連続しているように詠まれているものもある。九江付近と巫山とはひとつながりの世界だったのである。それゆえ、「九江」に作るテキストも後世の人に違和感なく受け入れられ、今に伝わったのだろう。唐詩には、現代の我々にはわかりにくい独特の語感、イメージを持ったことばが、まだまだ多くありそうである。「潮」について考察する中で見られた、万齊融詩の中の「春夢」なども、非常に興味深いことばである。これらについては、唐詩を細かに読み進めていく過程で説明していくことができると思われる。引き続き、唐詩のことばを追いかけていきたい。

注

- (1) 本稿の底本には中華書局点校本『樂府詩集』を用い、校本には『全唐詩』卷十七(張循之)、卷九十六(沈佺期卷)、卷九十九(張循之卷)、『文苑英華』卷二百一(張循之)、『雲溪友議』卷上引沈佺期「詩」、『唐詩紀事』卷二十一「沈佺期」引「巫山高」、同卷五十一「繁知一」引沈佺期「詩」を用い

た。この作品は、作者の断定が難しい。本稿では、『楽府詩集』に従って、この作品を張循之「巫山高」と称する。

(2) 巫山には、宋玉の「高唐賦」に見えるように、楚の襄王が夢の中で神女と男女のちぎりを交わしたという伝説が残っている。また、同じ宋玉の「神女賦」にも夢に神女を見た宋玉が別れを悲しんでいる場面が描かれている。「高唐賦」、「神女賦」とともに『文選』巻十九に収められている。

(3) 高歩瀛氏は『文選李注義疏』巻七「子虚賦」の中で、『太平寰宇記』巻一百三十二「淮南道 安州・汉川県に「陽臺廟、在縣南二十五里。有陽臺山。山在漢水之陽、山形如臺。」(陽台廟は、県の南二十五里に在り。陽台山有り。山は漢水の陽に在り、山の形は台のごとし。とあるのなどを引き、『高唐賦』高唐巫山連言之。且曰、「状若砥柱、在巫山下。」是陽雲臺即巫山。」「高唐賦」に高唐巫山之を連言す。且つ曰く、「状は砥柱のごとく、巫山の下に在り」と。是れ陽雲台が即ち巫山ならん。」と指摘している。

(4) 「故宮」【寒泉】古典文献全文検索資料庫」を検索した限りでは、他に次の例が見られた。注(8)も同様にして示す。
……南溟接潮水、北斗近鄉雲。行役從茲去、歸情入雁群。

(孫逖「京口」康夜行」巻一百一十八)
鏡吹喧京口、風波下洞庭。楮圻將赤岸、擊汰復揚舲。日落江湖白、潮來天地青。明珠歸合浦、應逐使臣星。

(王維「送邢桂州」巻一百二十六)
……落潮洗魚浦、傾荷枕驛樓。明年菊花熟、洛東泛觴遊。

(儲光羲「京口」送別王四誼」巻一百三十八)

……氣混京口雲、潮吞海門石。孤帆候風進、夜色帶江白。……

(劉長卿「京口」懷洛陽旧居兼寄廣陵「三知己」巻一百四十九)
……故人亦滄洲、少別堪傷魂。積翠下京口、歸潮落山根。……
……(劉長卿「旅次丹陽郡遇康侍御宣慰召募兼別岑單父」

巻一百五十)

北固巖端寺、佳名自上台。地從京口斷、山到海邊迴。曙色煙中滅、潮聲日下來。……(盧肇「題甘露寺」巻五百五十一)
江干古渡傷離情、斷山零落春潮平。東風料峭客帆遠、落葉夕陽天際明。……(陸龜蒙「京口」巻六百二十四)

京口潮來曲岸平、海門風起浪花生。人行沙上見日影、舟過江中聞櫓聲。……(徐鉉「登甘露寺北望」巻七百五十一)

華陰少年何所希、欲餌丹砂化骨飛。江南藥少淮南有、暫別胥門上京口。京口斜通江水流、斐回應上青山頭。夜驚潮沒鸕鶿堰、朝看日出芙蓉樓。搖蕩春風亂帆影、片雲無數是揚州。揚州喧喧賣藥市、浮俗無由識仙子。……

(皎然「買藥歌送楊山人」巻八百二十一)

江橫渡闊煙波晚、潮過金陵落葉秋。嘹唳塞鴻經楚澤、淺深紅樹見揚州。……(李紳「宿揚州」巻四百八十一)

山園故國周遭在、潮打空城寂寞回。淮水東邊舊時月、夜深還過女牆來。(劉禹錫「金陵」五題「石頭城、卷三百六十五)

龍形江影隔雲深、虎勢山光入浪沈。潮聲海風驅萬里、日浮天豎洞千尋。……(李紳「卻到金陵」登北固亭」巻四百八十二)

金陵津渡小山樓、一宿行人自可愁。潮落夜江斜月裏、兩三星火是瓜州。(張祜「題金陵渡」巻五百一十一)

……瓜步逢潮信、臺城過雁音。故鄉何處是、雲外即喬林。

（杜牧「金陵」卷五百二十七）

……雲移吳岫雨、潮轉楚江風。登閣慚漂梗、停舟憶斷蓬。歸期與歸路、杉桂海門東。

（許渾「金陵阻風登延祚閣」卷五百三十七）

「金陵」山色裏、蟬急向秋分。迴寺橫洲島、歸僧渡水雲。夕陽依岸盡、清磬隔潮聞。遙想禪林下、鐘香帶月焚。

（馬戴「送僧歸金山寺」卷五百五十五）

江亭當廢國、秋景倍蕭騷。夕照殘荒壘、寒潮漲古濠。……

（杜荀鶴「晚泊金陵水亭」卷六百九十一）

……寒日隨潮落、歸帆與鳥孤。興亡多少事、回首一長吁。

（王貞白「金陵」卷七百一）

（5）この他に、次の詩が見られる。

……「九江」春草綠、千里暮潮歸。別後難相訪、全家隱釣磯。

（劉長卿「送李二十四移家之九江」卷一百四十七）

離別那逢秋氣悲、東林更作上方期。共知客路浮雲外、暫愛僧房墜葉時。「長江」九派人歸少、寒嶺千重雁度遲。借問「潯陽」在何處、每看潮落一相思。

（皇甫冉「招隱寺送閻判官還九江」卷二百五十）

西江流水到「江州」、聞道分成九道流。我滴兩行相憶淚、遣君何處遣人求。除非入海無由住、縱使逢灘未擬休。會向伍員潮上見、氣充頑石報心讎。

（元稹「相憶淚」卷四百一十五）

賈傳南遷久、江關道路遙。北來空見雁、西去不如潮。……

（徐鉉「和江州江中丞見寄」卷七百五十二）

……元規樓迴清風滿、匡俗山春畫障開。莫忘故人離別恨、海

潮迴處寄書來。（徐鉉「送裴員外赴江州幕」卷七百五十四）

故國歸人酒一盃、暫亭蘭棹共裴回。村連三峽暮雲起、潮送「江」寒雨來。……

（杜牧「江上逢友人」卷五百二十六）

……綠林行客少、赤壁住人稀。獨過「潯陽」去、潮歸人不歸。

（劉長卿「和州送人歸復郢」卷一百四十七）

形擔江上遠、萬里詔書催。獨過「潯陽」去、空憐潮信迴。……

（劉長卿「奉送裴員外赴上都」卷一百四十七）

莫恨扁舟去、川途我更遙。東西潮渺渺、離別雨蕭蕭。流水通春谷、青山過板橋。天涯有來客、遲爾訪漁樵。

（劉長卿「赴江西湖上贈皇甫曾之宣州」卷一百四十八）

※七・八句、注云、「一作『潯陽如枉棹、千里有歸潮』」。

海潮南去過「潯陽」、牛渚由來險馬當。橫江欲渡風波惡、一水牽愁萬里長。

（李白「橫江詞六首」其二、卷一百六十六）

「潯陽」江色潮添滿、彭蠡秋聲雁送來。南望廬山千萬仞、共誇新出棟梁材。

（劉禹錫「登清暉樓」卷三百六十五）

……細雨湘城暮、微風楚水春。「潯陽」應足雁、夢澤豈無塵。猿叫來山頂、潮痕在樹身。從容多暇日、佳句寄須頻。

（姚合「送韓湘赴江西從事」卷四百九十六）

……逢君從此去、背楚方東走。煙際指金陵、潮時過「潯口」。行人已何在、臨水徒揮手。惆悵不能歸、孤帆沒雲久。

（劉長卿「孫權故城下懷古兼送友人歸建業」卷一百四十九）

公務江南遠、留驩幕下榮。楓林綠楚塞、水驛到「潯城」。岸草知春晚、沙禽好夜驚。風帆幾度泊、處處暮潮聲。

（李嘉祐「送裴員外往江南」卷二百六）

分務江南遠、留歡幕下榮。楓林繁楚塞、水驛到「潯城」。岸草知

春晚、沙禽好夜驚。風帆幾泊處、處處暮潮清。

(皇甫冉「送裴員外往江南」卷二百五十)
迴望湓城遠、西風吹荻花。暮潮江勢闊、秋雨雁行斜。……

(竇羣「早秋江行」卷二百七十一)
漢陽無遠近、見說過湓城。雲雨經春客、江山幾日程。終隨鷗鳥去、祇待海潮生。前路逢漁父、多慚問姓名。

(鄭常「謫居漢陽白沙口阻雨因題驛亭」卷三百一十一)
茂宰驟官去、扁舟著綵衣。湓城春酒熟、匡阜野花稀。解纜垂楊綠、開帆宿鷺飛。一朝吾道泰、還逐落潮歸。

(徐鉉「送龔明府九江歸寧」卷七百五十五)

(6)「麻姑」について、『增訂注釈全唐詩』卷二百五十六(熊成鋼氏担当)は「此喻女道士、即叶道士之情人。」と注する。
(7)「庾樓」は、晋の庾亮が江州刺史であったとき、殷浩らと南樓に上つて月を觀賞し、詩を詠んだりしたという故事に基づく。『晋書』卷七十三「庾亮伝」に見える。

(8) 儲仲君撰『劉長卿詩編年箋注』(中華書局、一九九六年)は、「潮信」二句の注に「潮水漲落有時、故稱潮信。唐時潮水可至潯陽(即江州)。」と言い、張繼「奉寄皇甫補闕」を引く。楊世民校注『劉長卿集編年校注』(人民文学出版社、一九九九年)は、「潮信」に「潮水漲落有時、如守信約、故稱。」と注している。

(9) 薛六、柳八について、前掲注(8) 儲仲君箋注によった。
(10)『大明一統志』卷六十四「衡州府」回雁峰に、「在府城南。鴈至衡陽、不過遇春而回。或曰、峯勢如鴈之回、故名。」(府城の南に在り。鴈衡陽に至り、春に遇ふを過ぎずして回る。

或いは曰く、峯勢鴈の回るがごとく、故に名づく」とある。実際には、江州と衡陽は直線距離で約四五〇kmあるが、のちに「九江」と「巫山」の位置関係について述べたのと同様に、同じ江南道に属するというイメージの中で回雁峰のある衡陽と江州を同一視して扱っているのかもしれない。この点については、もう少し検討の余地があると思われる。稿を改めて考えてみたい。

(11)『漢書』卷五十四「蘇武伝」に「敎使者謂單于、言、『天子射上林中得雁。足有係帛書、言、『武等在某澤中。』』(使者をして單于に謂はしめんとす、言ふ、「天子上林の中に射して雁を得。足に帛書を係ぐ有り、言ふ、『武等は某沢の中に在り』」と)とある。

(12) この他に、張繼、劉長卿までの詩で、雁と潮がともに詠まれる例として次のようなものが見られた。

陽月南飛鴈、傳聞至此回。我行殊未已、何日復歸來。江靜潮初落、林昏瘴不開。明朝望鄉處、應見隴頭梅。

(宋之問「題大庾嶺北驛」卷五十二)
宿帆震澤口、曉渡松江濱。櫂發魚龍氣、舟衝鴻雁群。寒潮頓覺滿、暗浦稍將分。氣出海生日、光清湖起雲。……

(宋之問「夜渡吳松江懷古」卷五十三)
……南溟接潮水、北斗近鄉雲。行役從茲去、歸情入鴈群。

(孫逖「下京口埭夜行」卷一百一十八)
……鷗鷺山頭微雨晴、揚州郭裏暮潮生。行人夜宿金陵渚、試聽沙邊有鴈聲。

(李頎「送劉昱」卷一百三十三)
(13) 周祖譚主編『中国文学大辞典 唐五代卷』(中華書局、

一九九二年」の「劉長卿」の項によると、劉長卿と張継の間には交遊があった。この表現について、二人の間に何らかの影響関係があったかもしれない。

(14) この他、皎然には、撫州（現在の江西省撫州市）、建州（現在の福建省建甌市）から「潮」に乗って手紙や思いが届くという例がある。

……天寒驚斷雁、江信望迴潮。歲晚流芳歇、思君在此宵。

（皎然「冬日送顏延之明府撫州覲叔父」卷八百一十八）

亂峰江上色、羨爾及秋行。釋氏推眞子、郗家許貴甥。麝花新雨淨、帆葉好風輕。千里依元舅、迴潮亦有情。

（皎然「送簡栖上人之建州覲使君舅」卷八百一十八）